

町雑誌

千住

Senji



卷頭インタビュー ■ 頒価三〇〇円
千住で生まれた
「きいちのぬりえ」
特集 ■ とびっきりの日本の暮らし
千住の1年の楽しみ方 PART3



連載

- 千住明治の女伝⑨
- 千住蔵の町⑦
- 千住発見⑦
- 千住 20sの風景②

保存版

VOL. 11 MachiZasshi Senju

千住で生まれた

「きいちのぬりえ」

卷頭インタビュー
葛谷喜一さん

思い出というものは、小さなきっかけで突然、箱をひっくり返したように次々出てくるものだ。「きいちのぬりえ」の絵には、それで遊んだことがある人に子ども時代のワンシーンを甦らせる不思議な力がある。文房具や駄菓子の並んだ店先であれこれ迷って買ったカラフルな表紙の絵袋や、ちやぶ台に広げてこれをぬろうかと選んだ樂ひさ。暑の茶の間に日黒テレビ、裸電球の暗めの光や温った空気、母親の足踏みミシンの音までが聞こえてくる。「きいちのぬりえ」の画家、葛谷喜一氏は、このぬりえを描き始めた2年間を千住宮元町で暮らした。初期の「きいちのぬりえ」に登場する童女は皆千住生まれなのである。

絵のモデルは奥さん?



小鳥のついたサインは
「幸せの青い鳥」からの発想だったそうだ。



ぬりえに親しんだ人なら、「葛谷喜一」という漢字の文字よりも、あの小鳥が運ぶリボンに書かれたりひらがなの「きいち」のほうがしつくりくるだろう。この小文も「きいちさん」で通させていたい。

きいちさんの現在のお住まいは、千住から特急で20分の埼玉県春日部市である。私たちを出迎えたきいちさんは、モスグリーンのゆつたりしたヘンリーネックシャツの襟元を、紺地に白の水玉のスカーフでアクセントをつけた着こなしで、実にお洒落な紳士だった。仕事も現役で隠居生活にはほど遠い86歳なのである。玄関を入れるとそこかしこに最近手掛けた絵やポスターが飾られており、憧れの絵を前に早くもワクワクしてしまった。

お茶を運んで来られた奥様にぜひひとお願いして、お二人にお話を伺うことにした。和服に前掛



目 次



■ 特集	千住で生まれた「きいちのぬりえ」 とびっきりの日本の暮らし
	千住の1年の楽しみ方PART3
今年は	あつても 大祭 千住の祭
千住神社	千住神社
本水川神社	本水川神社
仲町水川神社	仲町水川神社
八幡水川神社	八幡水川神社
柳原神社	4丁目水川神社
鳶のじと	鳶のじと
千住の寄席	千住の寄席
金蔵寺落語会	金蔵寺落語会
安養院彼岸会奉納落語	安養院彼岸会奉納落語
日の出寄席	日の出寄席
湯つ足り寄席	湯つ足り寄席
千住の元気EVENT!	千住の元気EVENT!
柳原音楽祭	柳原音楽祭
千住大川町地蔵祭	千住大川町地蔵祭
千住明治の女伝⑨	千住明治の女伝⑨
江端ちか	江端ちか
連載	連載
千住発見⑦	千住発見⑦
晴れたらいいねッ!の千住	晴れたらいいねッ!の千住
お願いなど	お願いなど
千住 20'sの風景②	千住 20'sの風景②
伊佐次茂伸	伊佐次茂伸

36 34 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 20 19 18 16 14 13

裏表紙





千住の家で描いたという絵本「はなこさん」のページ。
当時の千住の風俗がうかがえるような気がする。



同じ問い合わせにきいちさんは、「絵にこの人が似てきちゃつたんだ」と言つてまた一人で楽しそうに笑いあつた。こうして並んだお二人を見れば、誰もがこんな風に歳をとりたいものだと思わずにはいられないだろう。良かった。平和で幸せな実生活があつて、あの絵の数々が生まれたのだ。作品と現実がすんなりつながつて一つアンとして嬉しかつた。

このお二人の新婚生活も実は千住からスタートしている。

きいちのふるさと「千住」

「千住は第二の故郷なんですよ」お会いしたとたんのきいちさんの言葉に、私たちはすっかりうれしくなつてしまつた。きいちさんは、大正3年に京橋の紙問屋の五男として生まれるが、手広く商売をしていた実家は震災後すぐ、千住宮元町にも事務所を、足立区本木に工場兼倉庫と住居の一部を構えたので、こどものころからきいちさんと千住の関わりは始まるのである。

きいちさんは、使用人のたくさんのいる裕福な家で不自由なくのびのび育つ。きょうだいの上下が女だつたせいもあり女の子と遊ぶことが多かつたので、着物の端切れで人形つくりをしてはまごとに興じ、母親のお供をして呉服屋に出かけるのが大好きだつた。きいち少年は、小さい頃から美しいものに並はずれた憧れをいだいていた。「自分が見えていないくらい小さいときから母に『きいちは呉服の生地の名前やなんかすぐに覚えちやうんだ』って言われてたんですよ。生まれつきのものなんでしょうね。まわりに女が多かつたといふだけではなく、好きだつたんです。それにまわりから『もっと男らしくしろ』とか『女の子みたいだ』と言われたこともなかつたんです。まわりもそういう子供だと思っていたみたいで、きいちのぬりえの着物の絵柄の繊細さ、美しさが秀でているのは、まるで女の子のように育つたきいちさんを型にはめようとせず、やさしく見守つたまわりの人たちの度量のたまものだと思ひざるを得ない。

そんな感性をはぐくんだきいちさんは、17歳のころ、ふらりと出かけた上野の美術館で山川秀峰の絵に感銘を受けたのがきっかけで、川端画学校に通い始めた。それからは将来は絵を仕事に結びつけたいという夢を持ち続けたのだが、なかなかそのチャンスをつかみきれず、長兄の勧めで駄菓子屋を開いたこともあつた。

ぬりえ、そして千住で始まつた新婚生活

昭和15年、26歳のきいちさんに画学校時代の友人が「ぬりえの仕事をやらないか」と持ちかけた。そこには縁日にもぬりえの屋台が出ており、画

燃やしたことだろう。

昭和30年頃、やはり彼女たちはタ

ーゲットに相次いで少女漫画雑誌が創刊された。雑誌そのものよりも付録に熱い視線が集まつたが、なかでも紙のぬりえは大人気であった。独創性はぬりえほどではないにしても、紙の上でさまざまなファンションを楽しめるという点では共通していたと言えるだろう。きいちのぬりえやきせかえは、その時どきの服や髪形の流行を取り入れたものであつた。少女たちは、自分が着たい服を紙の上に再現しながらファッショセンスを磨いていったのであろう。

千住の少女たちも、女の子同士で遊びになつたが、外で男の子たちと一緒に駆け回るのも大好きだつたようだ。幼い弟妹を背負つてお守りをしながら、さまざまな年齢の子どもたちと遊んだ。荒川で土手滑りをしたり、工事現場で遊んだり、まちの中へいたずらをしたり。そんな彼らを、まちの人たちは何気なく温かく見守り、危ないことや人に迷惑をかけるようなことをすると、容赦なく叱つたのであつた。

1950

年代の少女たちと遊び



喜一さんゆかりの人々と 当時の風景

『絵かきさん』って呼んでました

渡辺英子さん

(お隣にお住まいの千住神社おくさま) 昭和23年に長野から嫁に来たんですけど、わからないことが多いです。喜一さんの奥様にいろいろ教えてもらいました。気さくなくて、いい方でした。あの二年ほどで、もう少し会う機会があったらしく、立ち話してました。お隣の神社と喜一さんの家の間が竹垣で、よく顔を合わせたのです。喜一さんのことは絵が好きで、なんでも呼んでいたんですね。喜一さんは、一番下なので、みんなにがわりがられて、やさしい、いい感じの方でしたよ。一度はお隣に遊びに来てもらいたいことがあります。ありがとうございます。お隣の神社へお風呂をもらうに行つたんですよ。(2004.4.30)



まささんとは同郷で…

内田美和さん

(千住仲町の老舗川魚問屋)

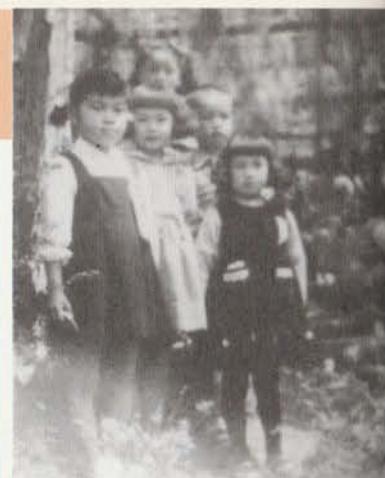
まささん(お嫁さん)はおとなしいやさしい人でしたけど、お母さん(故人)はしっかりした下町風のおばちゃんっていう感じの人で、よく世話をしてくれました。戦後しばらく、神社へお風呂をもらいに行つたんですよ。お隣の神社と喜一さんの家の間が竹垣で、よく顔を合わせたのです。喜一さんのことは絵が好きで、なんでも呼んでいたんですね。喜一さんは、一番下なので、みんなにがわりがられて、やさしい、いい感じの方でしたよ。一度はお隣に遊びに来てもらいたいことがあります。ありがとうございます。お隣の神社へお風呂をもらひに行つたんですよ。(2004.4.30)

まささん談: あるときお風呂で会ったんですよ。千住にこんなきれいな女性がいたんだ、と思って見ているとお嫁さんのお嬢だったんです。「お風呂が嫌だったので」とおっしゃってました。生まれが同じでしたからお嫁入りのときの衣裳もお手伝いしたんですが、部屋中に吊られた着物の美しさに圧倒される思いでしたねえ…。

きいちさんが撮った、当時の千住などもたちの風景。女の子たちのくりくり巻いた髪型がなつかしい。

きいちのきせかえ。

きせかえは、サイズをピタリ合わせるのがむずかしいそうだが、きいちさんは、どんどんのめり込んで縫縫なきせかえをつくった。



千住神社での結婚式のあと、千住緑町の新居の前で撮った写真。5人兄弟のはな紅一点で育ったまささんの結婚は轟中ながら一大事で、お母さんが毎日呉服屋に通い、まささん含め姪っ子たち縫製員で花嫁衣装を立て上げた。黒地に草やかな刺繡が施された衣裳だったが、花嫁さんをたくさん描いていたきいちさんは「こんながんなんなものか」と思ったとか。きいちさんの暮らした家は少し前まで残っていたが、今は無い。左が、両所の現在の風景

家を目指すきいちさんにとっては、「こんなつまらない絵もあるなんだな、でもお金になるならやってみようかな」という気分でのスタートだった。そのため本名でなく「フジヲ」のペンネームで描いたが、歌舞伎を題材にした華やかなぬりえでたちまち売れっこ子の仲間入りとなる。フジヲは好きだった夏目漱石の『虞美人草』の藤尾からとった名である。

しかし時代が悪すぎた。翌16年には日本も世界大戦に呑み込まれ、ぬりえも姿を消さざるを得なくなつた。そして三鷹の軍需工場に通っていた19年、まささんと見合い結婚する。見合いの席でお茶を出したまささんはそのとききいちさんの顔すら見なかつた。そうだが、きいちさんの方はまささんを一瞥しただけで結婚を決めた。きいちさん29歳、まささん22歳の年だった。「12月29日に見合いして、翌1月19日に結婚。結婚式をしたのは千住神社なんです。当日、床屋へ行つていて、式に遅れてしまつたんですけど(笑)おつとりとしてマイペースなきいちさん的人柄がほほえましく思えた。

千住発、売れに売れた

「きいちのぬりえ」



新居は千住緑町に構えるが、わずか半年で召集令状が届き海軍省本部に配属となる。敗戦で戦争からようやく解放され、きいちさんは緑町の家に戻る。

このころまささんは実家に疎開しており、そのとき緑町の家に住んでいたきいちさんのお母さん、妹さ

んとしばらく同居することになった。柔道家だった兄は警察でも仕事をしていたので、その紹介で、月島の進駐軍の米兵の持ち込む家族の写真を、肖像画に描き起こす仕事を始めた。きいちさんの器用な和風の装丁は絵とともに大人気で、緑町の家で1年くらい続けたという。ようやく収入が安定してきたと思ったところ進駐軍が引き揚げるが、まるで入れ替わりのように、戦前つきあいのあつたぬりえの販売会社が訪ねてきたのである。一時日本橋の蛎殻町に移り、まささんを呼び寄せてぬりえの仕事を始めた。

このころペンネームを「フジヲ」から本名の「きいち」に改めたあたりに、本腰の入れようが見て取れる。そして昭和22年の春、兄が千住宮元町につたや道場を開き、その周辺にきようだいが集まつて暮らし始めた。それからの2年間、この千住宮元町の居心地のいい小部屋から、日本中の子どもたちに向けてたくさんのぬりえが生み出されていったのである。

「戦後おもちゃが何もないころで、こどもたちの娯楽がないでしょ。だからぬりえが次々飛ぶように売れはじめたんですよ。階段をのぼり始めた頃でした」月に百万セットから百六十万セットを売り出したといふのだから一晩に30枚以上描くことも珍しくなくまさに眠る暇もない生活だった。最愛のひとり娘美絵子さんをもうけたのも千住宮元町の家だった。きいちさんは同じ足立区の梅島に家を建てて引っ越ししたが、それからも親兄弟が暮らし、娘が踊りや幼稚園へ通つた千住へはたびたび訪れているので、



駄菓子や雑貨を扱う、ご主人は、売っていたぬりえに「そういえば『きいち』と書いてあった」と思ひだしてくださった。この店の店や路地で、こどもたちがいっぱい遊んでいたままにうちに遊びに来るのです。女の子が、ぬりえ、きせかえ、おはじき、お手玉、ピーズ、リリアン、コムなどび…車がないから、いろんな遊びがあつてね。あのころのこどもは活潑だったね。夕方まで外で遊んでましたよ



千住神社の境内で遊ぶ娘の美絵子ちゃんど、きいちさんのお母さん。美絵子ちゃんの洋服のがわいいらしさは、きいちのぬりえそのもの。これも喜一さんのデザイン。「千住神社の境内では、よく紙芝居をやってましたね。娘をおひでてよく行きました」とまささん。

えの童女に可憐な和服が多かつたのもお稽古ごときが深く影響しているのではないだろうか。余談だが、きいちさんはまささんの和服の仕立ての手伝いもスラスラとこなし、そればかりか古い帯からハンドバックを作つてまさんにプレゼントしたり、いつの間にかフランス人形や日本人形をこしらえては、手芸店の店先に飾つていたというほどの器用な手先の持ち主である。



つたや道場（宮元町25-9）
喜一さんの兄正雄さんが昭和22年に
建てた道場は、後藤香公允さんの指
導のもと、今もこどもたちのかけ声で活気に満ちている。隣（写真奥）の接骨院の施所が、当時木造の喜一さん宅。（2000.5.8）

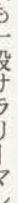


A black and white line drawing of a young girl with short hair, wearing a school uniform consisting of a blazer over a collared shirt and shorts. She is holding a book in her left hand and a pencil in her right hand, looking down at the book.

千住宮元町で踊りを習う

千住宮元町で踊りを習う

この足立区時代、収入も一般サラリーマンの8～9倍あつた。そのほとんどをきいちさんは稽古ごとにしつぎ込んだ。仕事は夜中にして、昼間は茶道・華道・長唄・三味線・日舞と、稽古に熱中した。中で



きいちさんは千住を「住んでいなくとも自分の土地」だと思っていたのだそうだ。きいちさんの両足の土ふまずにはほくろがあり、易者にも「一力所にじつとしている人間じゃない」と言われ、事実引つ越しを繰り返した回数は果てしないのだが、「生まれてはないけど、そのころは『千住の人間』だったんですよね」と話してくれた。



喜代先生も印象に残っているとい
喜一さんの「山姥」の舞台。



今もお稽古道にかけられた名取名。喜一さんが名取りになったのは昭和31年2月のこと。喜代先生のお弟子さんは皆「喜」の字を入れた新しい名取名をつけるが、ともども「喜」を名前に持つ喜一さんは本名のまま名取にならなかった。

「踊りの教室でも違和感がない人でした」

でも違和感がない人でした

花柳栄代先生（踊りの先生）
◇きいちさん講義；なよなよしたところの全くない、はっきりした先生でね。（笑）バリバリした女性でした。娘について行っているうちに、うずうずしてきてやりたくないな、ちやって始めたんです。また踊りたくなって来ちゃつたなあ（笑）。今度88歳だから記念に踊ってみようかなあ…。

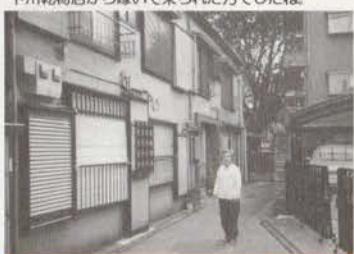
お稽古の日千住宮元町のお稽古場（おじやまち）

おさんにはお嬢さんの付き添いで来ていて、そのうち習いだしましたが、娘より本人の方が夢中になっちゃってね。男性もいる人いたんだが、腰が痛められる人が多いなあ、おさんには柔軟性でしたね。腰が折れましたよ（笑）。男ばかり5人集まつた人組のあって、仲がよくておもしろかったです。でも名取にまでなったのはおさんひとりでした。（2000年4月20日）



『あらこんな方がそばにいらしたのかと…』

おられました。でもいぶんたつて心とお名前をそいたとき、繪を描いておられるのが見えて、初めてぬりえを描く方だと知つたんです。娘が塗つたりしていたぬりえでしたから、あら、「こんな方がそばにいらしたのかな」と驚きました。あまり自分から話す方じゃなかつたんですね。（2000.5.8）



喜一さんがいたことのある三軒長屋はいまはアパートに（左がもときいちさん宅。右は当時も今も美乎子さんご一家の別宅）

に娘の洋服をデザインしたんですよ」という答えが

返ってきた。筆を持てば次々と洋服のデザインや模様が浮かんできたのだそうだ。きいちさんにとっては自然なことだったが、他の作家の絵を見て、これじやまずいな、と思つたことはあつたという。「だからなるべくしてこうなつたんだと思いますよ。いま思うと、私にはぬりえを描け、という何かがあつたんだと思います」ときいちさんは言つた。

新しいきいちの世界が広がつて

昭和20年代半ばごろがぬりえブームの最盛期で、巷にはぬりえ作家が40人以上いたという。当然きいちさんの作風を模倣したものも出回るが、どんなに似せて描かれていても子どもの目はごまかせなかつたか、自然に消えていった。

昭和35年テレビの普及とともにぬりえブームも下火になり、39年にはすっかり火が消えてしまい、派手な生活から一転、家も手放し、練馬、川越、上福岡と転居を重ねた。40年代に入つてからは美人画作家に転身するが、体調も崩しがちだった。しかし、子ども時代に「きいちのぬりえ」に親しんだ世代がマスコミや広告業界などで活躍するようになると、きいちさんのもとに個展や仕事の話が舞い込むようになつた。体調も回復してきてぬりえとは違う分野で、きいちさんは再び脚光を浴びるのである。

密かなきいちブームは、駅貼りの大きなポスターや新聞の広告、大手出版社から出ているきいちさんの豪華本の売れ行きに現れている。現在手掛けているのは「童女百態シリーズ」。ため息が出るような美しい絵のシリーズである。

きいちさん自身が常に楽しんで描いてきたという童女たち。その絵を愛する根強いファンは数知れない。世の中に遊び道具があふれてすっかりぬりえが姿を消してしまつた今も、ざら紙に刷られた可愛い童女たちは、ファンの心の中にしっかりと残つて懐かしい風景とともに小首をかしげて微笑んでいるのである。

わくわくしながらの取材を終えて、ふときいちさんについて聞いてみた。今度千住で個展をやりませんか?すると意外にもすんなり、千住でならやつてもいいかな?...そんな答えが返ってきた。伺う前よりさらにもつと「わくわく」する少女のような気持で、帰路についた。(取材・文/H、F・写真/M)

『窓のそばで絵を描いてました』

清水明納さん(姪の夫)

私は昭和22年からたや道場の塾生になりましたので道場に通泊したりしてましたんです。事一さんは道場の隣の家にいて、通り沿いの部屋で絵を描いていたので、よくそのそだつたのです。夏なんか窓が開いていましたしね。そのうち上がり込んで、髪の毛を一本一本細筆で描いていくのをじっと眺めたりしていました。娘の娘が好きだったので、あるとき喜一さんに頼んで、柔道着を着た女の子を描いてもらつたんです。昭和23年頃だったかな。まだ柔道をする女の子はいなかつたらしいでした。

(明納さんはその後昭和30年、つたや道場に

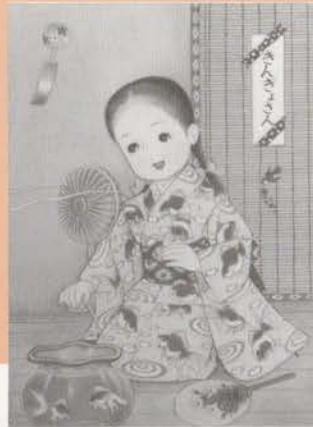
出入りしていた喜一さんの姪の侑子さんと結婚

されました)

2000.5.19



明納さんが大切にしている、きいち作「柔道着の女の子」。昭和23年の貴重な作品。サインは喜一夫妻の名前で、中学生のころには喜一夫妻の家に預けられて一緒に暮らしていた



きいちさんの絵
を使った数年前の
コマーシャルポスター

きれいに塗れたら大人になったとき

お化粧が上手になるのよ…

『きいちのぬりえ』は、叔母がお米屋と乾物屋を商いして、片隅に駄菓子を置いていたこともあります。ごほうびにと、よく頂いたりおねだりした宝物のひとつでした。大きな目、かわいい口、自分がいつか着られると夢見て…。幼い私には(当時5歳くらい)、お花や水玉のドレスや着物をはみ出さずに塗るのはむずかしかったです。ここは何にしようか、今日はクレヨン(当時6色)と色鉛筆(当時12色)のどちらで塗ろうかと、あきっぽい私が悩み、1枚もなかなか仕上がりませんでした。「あのね、ぬりえはね、きれいに塗れたら大人になったとき化粧が上手になるよ。最後は『お嫁さん』が上手に塗れるといいね」と大人たちに励まされたものです。といっても、当時は大人たちも子供にかまう暇もなかったので、じっとしていられない子供を静かにさせ、根気や集中力を育てるには都合がよかったのではないかと、大人になり思います。近所の女の子たちと外でゴザを敷いて、おやつを食べながら、できあがったぬりえをお気に入りの箱に入れ自慢しあうけれど、お友達の方がきれいに塗ってあり、いつもやらやましく思ったおぼえがあります。なぜか、ぬりえの上の方に『きいち』とか『ふじを』と書いてあり、絵と名前がアンバランスで不思議に思いましたが、まさか男の人が女の子の夢を作っていたなんて、思ってもいませんでした。今も売っているのかしら?ぜひ探してみたいですね。中年になった今、幼いに戻り、誰もいない部屋で(厚化粧が上手にできるようにと)、塗る?それとも孫の夢のために…(藤崎啓子)



写真左側



色彩の無い時代でした。

当時は物資が少なく、まちにも色彩がなかったんです。モノトーンの思い出のなかに、『きいちのぬりえ』の真っ赤なカバーは、おもちゃ屋さんの店頭でもひとり目立っていました。

(原島陽子)

現代の22歳が見るきいち

最初に見た時の感想は、「頭、でかっ!」私は、目に星系の絵は苦手なので、この時はちょっとゴカンベン、と思った。しかし見慣れてくると、見るからに育ちのよさそうな少女が、いつも幸せそうにこちらを向いてほほえんでいるので、「あんま好きじゃない」なんて言ったら泣き出してしまうんじゃないかと思えてきた。また、着ている服が時代を反映していて、見て飽きない。そんなわけで、いつのまにか虜になりつつある…(高頭恵美)



40歳の今日。きいちの記憶～少年もきいちをぬった～

きいちは、僕の家に子供部屋がないころの妹の玩具だった。だから僕にとっても、手を伸ばせばいつでも触れることができるところにあった。妹がきいちの「ぬりえ」や「きせかえ」に向かう姿は、当時ままごと遊びの中に醸し出されていた。様式美への背伸びが、家の外から中へ移され、同時に妹の表情をわずかばかり大人にしていた。『男の子はワンパンク』時代の僕は、妹の前で「きいち」に向かい合ったことはない。でも、家でひとりぼっちになったとき、僕は密かにきいちとたわむれた。「ぬりえ」は腹ばいでぬった。「きせかえ」は紙のプラモデルだった。今、あらためてきいちの世界を眺めると、当時の匂いがよみがえてくる。クレヨンや糊の匂い。それらは家で遊ぶときの必須品の匂いだった。きいちは、からだを通して楽しむものとして存在した。それはまるで、唄われることで新たな命が生まれて来る童謡のように。

(館又将文)

12色のクレヨンと色えんぴつと油絵の具

絵が大好きだった幼いころ、12色のクレヨンで毎日のように絵を描いていました。動物の絵は父、花の絵は母が先に描いてくれて、それを手本にして遊んでいました。ある日叔母が『きいち』のぬりえ帳をプレゼントしてくれ、とても可愛くて嬉しかったことを憶えています。でも毎日毎日眺めるだけ。すると、父が会社の帰りに12色の色えんぴつを買ってきました。父は、私がクレヨンでは『きいち』のぬりえがはみ出るのを嫌がっていたことに、きっと気づいていたに違いありません。それからというもの、塗りながら、幼いながらにぬりえの少女のまわりの情景を想像しながら、自分がぬりえの主役になっていたことを想い出します。そして中学の入学祝いに両親から油絵の道具をプレゼントして貰い、12色並んだ油絵の具を見たとき、12色の色えんぴつと『きいち』のぬりえ帳をちょっぴり懐かしく思い出した記憶があります。今では画材店に足を運び、12色の色えんぴつを見つけるたびに、他界した両親の優しさを想い出します。(上田景子)

写真左側



少女たちのきいち

きいちのドレス

きいちのぬりえやきせかえは、子供のための情報が少なく、既製服もあり無い時代、子供のための格好のスタイルブックとなって、パーマ屋さんで、髪を縦ロールにしてもらったり、仕立て屋さんに持ち込んだりと、イメージを伝えるには、最適の手段でした。写真是昭和27年、区役所通りの高橋洋装店で『きいちのぬりえ』をもとに依頼、三丁目の小林写真館で撮影したもの。当時は写真館へ行くのも一種のレジャーでした。想像していたピンクではなく、塗らないで渡したままの純白ドレスの出来上がりに実はちょっとがっかりしたのです。



うれしくて、うれしくて…

母親といっしょの買い物帰り、雑貨屋さんの店頭で買ってもらった赤い表紙のきいちのぬりえ。うれしくてうれしくて、手に持てて大きく振って歩いていたら、中のぬりえがパラパラこぼれ落ちてしまふらしく、家に着いた時には中身がなく外袋だけになっていて、大泣きに泣いたことを想い出します。

(穂原恵子) 写真左側



友人たちの顔を想い出す

敗戦直後、物資は乏しく七色の色鉛筆は宝物。今から思えば紙質の悪い「ぬりえ」でしたが、仲良しの友人と色を塗ったり書きかえをしたり、夢物語は限りなく拡がっていました。『きいち』のサインを見て、昔、おはじきやゴムとびをした友人たちの顔を想い出しました。

(船田君子)



千住には「神輿の連合渡御」が2つある。聞くところによると、それぞれに異なる神社から御靈をいただいた神輿が集まって町内を巡行するというケースは、祭りの盛んな東京の他地域でもあまりみられないといふ。南北に2千口余のエリア内に神社がいくつもあり、しかも震災戦災を焼け残った、東京でも指折りの江戸の神輿が数多い。それぞれに元気のいい歴史を持つ宿場町千住ならではの底力ではないだろうか。更に2つの連合渡御がいっしょになって町内を練り歩くことができれば、東京でも指折りの、歴史と賑わいを兼ね備えた祭りになるのになあと、夢を持つ人も少なくない。

大祭へ
行こう！

今年は 大祭！

千住の祭

とびっきりの日本の暮らし
千住の一年の楽しみ方

PART3

9月14日(木)

PM 6:30 板垣通り出発

PM 8:00 境内信用金庫車庫終了

千住1丁目～5丁目までの町会

が連合で旧日光街道を練り歩くこ

の連合渡御は今年で第18回を迎え

る。今年当番町会の坂本俊明さん

に見どころを聞くと「大きな獅子

頭から2本の棒でかつぐ珍しい二

天神輿までさまざまな祭りのスタ

イルが見られることじゃないでし

ょうか」。先頭を行く獅子頭は、大

正4年に獅子徳という獅子彫りの

名人が造った名品。町会ごとに特

徴があつておもしろい。昔大名行

列も通った宿場町千住の細長い旧

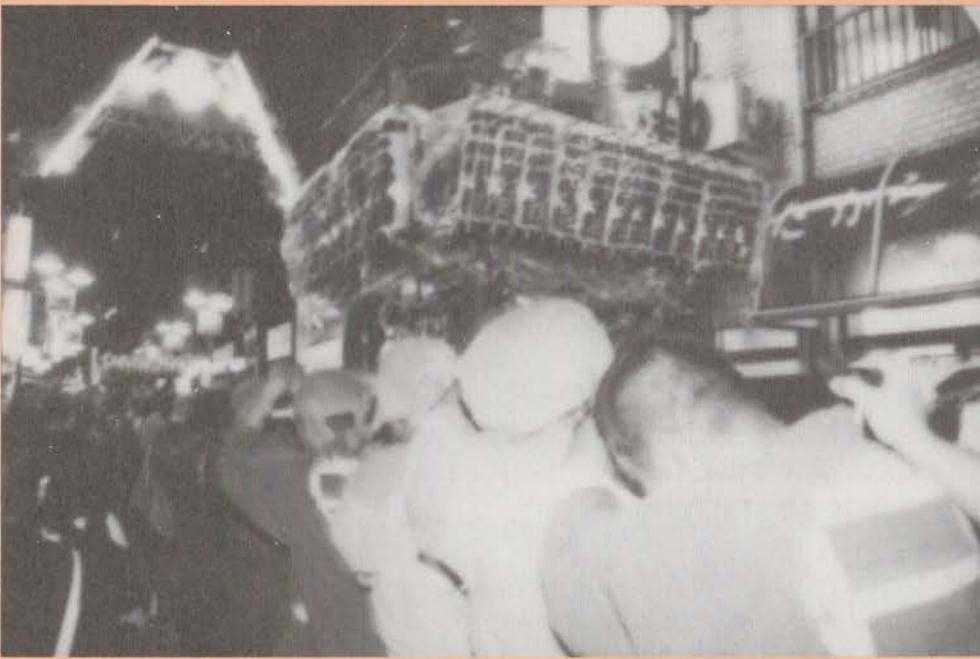
道。日も落ちた、ほの暗い夜道を

ゆく連合渡御は、その熱気とともに、古い時代がふとよみがえる瞬間に「出逢う」不思議な時間である。

(問先：坂本3888-1888)

■千住祭連絡会連合渡御

北千住の駅前通り、都民信用金庫前にいっしょに出発して連合渡御し、五町会連合とは異なり最終的に各町会まで帰っていくのが特徴。7月末現在、日程ほか詳細は未定



千住神社

千住宮元町	24
9月15日(金)	1
AM8:00	3
宮出し	8
行列巡行	8
PM4:30	1
宮入	7
	6
	8

宮司の衣裳

渡辺宮司は、
今年袍（赤）
に紋袴（紫）
をまといます。
※神社本庁より授
かれた位に応じ
て、宮司の衣裳の
色が違う。位と色
を結びつけた起源
は、日本古来、聖
德太子までさかの
ぼる。
(色)による位の順：
袍（上衣）：（黒） - （赤） - （濃紺）
袴：（紋入紫） - （紫） - （水色）



今年は馬が三頭出る

「例年の大祭では『宮司』一人だけが馬に乘りますが、今年は『神幸委員長』『欄宣』も含めて、馬が三頭もでるんですよ」と渡辺宮司。宮司と欄宣、神蹟が2人もいるのは今年ならではの試みだ！ ちなみに馬の色もチェックポイント。宮司の馬は通常「白」、それ以外の馬は「茶」が多いそうだ。

欄宣：各神社に奉仕した神職。宮司-権宮司-欄宣-権欄宣という順位にする。語源は、加護を願う勅詞「ねぐ」(勞)の名詞化したもの。

大神輿

江戸末期作の「一ノ宮みこし」が町へ繰り出すのはやはり10年ぶり。宿場町の荷人足がかりついで、屋根が大きくどっしきりとした重みある姿が特徴で、戦後2、3回は農作業用の牛で引いたとのこと。「かつざたい人」歓迎。町会に頼んで入れてもらおう！



明治100年時の大祭の行列

昭和9年、一の宮と二の宮の巡行

2000年、めぐってきた千住神社大祭。5年前は雨で中止だったので、10年ぶりの行列だ。「気象庁に『いくら払うから、千住だけは晴れにしてくれ』って言えればいいんだけど」「少々の雨ならやりたい」と、今年の大祭への宮司の思い入れは相当なもの。台風シーズンなので天気が何よりも心配なのは千住住民共通の思い。こんなときこそ神だのみといきたいところ。ここではちょっとツウな大祭行列の楽しみ方をご紹介します！

猿田彦

記紀神話によれば、高天原から天下ったニニギノミコト一行を出迎えて道案内をした異形の神のこと。その姿は長大な鼻と赤ぼうずきのように照り輝く目に特徴。一方、神楽などの民俗芸能におけるサルタヒコは、天狗にも見紛う高い鼻と赤い顔で、威風堂々と神楽の行列を先導することで知られる。このように、神話と芸能の双方で、行列を先導する役割を担う「サルタヒコ」。その信仰の起源と伝播にはなぞが深そうだが、千住神社の大祭行列の中では、その恐ろしいけれども愛嬌いっぱいの顔が注目的。



社名旗

おひろめ「千住神社」の社名旗。紫地に、金糸の文字。天皇即位の礼の萬歳旗を作った千住の刺繡師橋本一幸さん（町雑誌千住8号で紹介）が、萬歳旗と同じ材料同じ手法で製作。“筆なり”的手法で、図柄や文字に威勢を吹き込む橋本さん。新しくなった社名旗から、「力強さ」をわけてもらおう。



神楽殿での浦安の舞

浦安の舞子

9月14日(木)
AM10:00～於本殿(一般公開なし)
AM11:00～於神楽殿(公開) PM 1:30～於神楽殿(公開)

9月15日(金)
AM8:00宮出し～PM4:30宮入
(行列に同行し、1～2カ所で舞う予定)

行列の一員としてかわいらしい姿を見せてくれるとともに神社の神楽殿でその舞姿が見られる。浦安の舞は昭和15年、紀元2600年祝典の際つくられた心の安らかさと平



今年の舞手たち。普段は元気いっぱいのやんちゃっ子。週二回の練習を経て、9月にはどんな姿見せてくれるのか、楽しみだ。踊りの指導は、北千住駅近くの喫茶「藏」の大和田公子さん(後列左端)

和をたたえ祈る神事舞で、以前は多くの神社で踊られたが、今ではほとんど姿を消し、千住神社に伝承されているのは貴重なこと。例年は4人が舞うところ、大祭の今年はプラス4人が行列に同行。昭和16年に始まった当初から、町内の小学6年生を中心とする少女たちが舞手として受け継いでいる。今年は、山崎佳美さん、竹内美貴さん、今間愛佳さん、小久保紗弥さん(以上舞手、前列左から)、安田早希さん、近澤梓さん、杉本京子さん、小久保璃奈さん(以上行列同行、後列左から)

大祭へ行こう！

千住本氷川神社大祭

(千住3-22、388-1-2857)

大神輿町内巡行列

9月17日(日)

AM 7:00頃宮出し・行列巡行～PM 5:00頃宮入り

今から約150年前、1846年(弘化3年)、町の大工の棟梁金相久次郎の手による大神輿が担ぎ出される。日光東照宮の建築にも携わったといわれる腕のいい千住の棟梁だ。近年は二本の棒でかつぐ珍しい2天神輿として練り歩き、要所要所で神輿を左右に倒して盛り上がりを見せる。猿田彦や馬に乗り正服を着た宮司など、前ページ千住神社で紹介した行列の見どころは同様に見られる。ちなみに本氷川神社宮司の今年の正服は上が黒で下が紫の紋袴。本氷川神社の大祭では、年配の総代のために人力車も用意され、いつしょに渡御する。



左右に神輿を倒しながら進む、珍しい2天神輿



神楽

9月16日(土)

PM 0:00頃～PM 9:00頃(1日4幕程度)

神を招き、その魂をしづめ、なぐさめるために演じる踊りが神楽。本氷川神社で踊られる神楽は、江戸里神楽といわれる、一般の人にもストーリーが比較的わかりやすいお神楽。埼玉県の鶯宮神社の神楽を源流として延宝年間(1673～80)に江戸に

伝えられ、元禄以降盛んになつたといわれている。本氷川神社では、ご神体である素戔鳴尊の登場する『大蛇退治』などを含み、1日に4幕程度演じられる。独特的の楽器で雅やかな音色が奏でられる中、面をかぶり豪華な衣裳をつけたおごそかな舞いが演じられるが、これを無料で観られるのは千住住民の特権。夜はかがり火のもと、舞う姿が神秘的。



旭町町会、昭和20年代の祭りモサ(猛者)たち、「みんないい体しててでしょう。このあたりは大工、左官、疊屋、とび職と、職人が多かったんですね」時代変わって次世代でサラリーマンとなった宮田昭明さんが話してくれたが、会社勤めとなつてもついついイベント担当となつてしまい、さまざまな企画を実行しているらしい。さらに次の世代、20代30代の若手たちも、祭りの日には子連れで里帰りしてくる



本氷川神社氏子町内のまつり横丁(千住旭町会)

とにかく昔から祭りモサ(猛者)が集まっているエリアなのだろう。「金はねえけど祭りは好きだっていうのはばっかりでね」(宮田昭明さん)特にこの影山食品店から始まる通称『まつり横丁』は、神輿が通れるのかなあと考えてしまうほどの細い道だが、先代のころから大の世話好きばかりが集まるユニークな横丁だ。たとえば町内神輿が通ると、ハナを向ける(神輿の前棒を家に向けて威勢をあげる)と、商店街でもないのに横丁に面するほとんどすべての家でご祝儀をくれるという。ご祝儀をもらったら「商売繁盛」「家内安全」「おばあちゃん元気で」など元気のいい祝辞とともに「よおーっ、しゃんしゃんしゃん…」とみんなで一本締め。一軒一軒右へ左へ神輿が首を振って進むものだから『おじぎ神輿』なんてあだ名をつけてくれる人も。

さらに近隣のおかみさんたちで作る『秋冬会』の心意気がいい。狭い横丁にそってビールのケースをズラリ並べ、その上に細長い板をのっけて大振る舞い。ビールに酒、煮物、おしんこ、おにぎりetc…会費を取るわけでもない、単なるおかみさんたちの『気持』については『過ぎているのでは?』と思わせられるほど、所狭しと並べられた手作り料理の数々が、神輿をかつぎ気持のいい汗をいっぱいかいいて帰ってくる祭り衆を大拍手とともに迎える。なんとも気持のいい人たちが集まつた、エネルギーあふれる横丁だ。



旭町内神輿の渡御

9月15日(金) PM0:00～PM5:30

秋冬会の振る舞い

9月15日(金)
PM7:00頃～



祭り横丁の町内神輿渡御。横丁ぎりぎりまで広がつて元気よく進む

【仲町氷川神社】

(千住仲町48-2、3881-5271)

宮神輿渡御行列

9月15日(金)

大祭へ
行こう!

A M 8:00 頃宮出し～行列巡行

P M 4:00頃宮入(予定)

都内でも江戸神輿はもう数少ないが千住
は江戸神輿の宝庫。神輿に詳しい文筆家林
順信氏も「さすが宿町で、江戸時代の職
人が、宿場に何日も泊まって、手間をかけ
て揃えあげた名品が多い」(江戸神輿春秋、
大正出版)と述べている。

その千住の中でも古い天保6年(1835年)
につくられたのがここ仲町氷川神社の
神輿だ。金梨地の屋根、胴部蒔絵の昇
龍、降龍や取りまく井垣に見られる珍
しい古典的な様式など見どころが多
く、素人目に見ても落ち着いた美しさ
が印象に残る神輿だ。「赤紫色に近い
漆塗と胴羽目(どうぱむ)の蒔絵風の細工が美術的
な作品として仕上がっていて、一般的
な神輿のでき方とは大いに異なる」(同
右)という神輿が、今年は修復され、
元気を取り戻して登場する。竹内宮司
に聞くと「鳳凰がリアルで、義眼が生
きているようです」とツウな見どころ
を教えてくれた。神輿は行列のまん中
あたりに位置し、町内を巡回するのも

5年に一度のこと。見逃せない。こち
らで馬にまたがる宮司の正装は上が赤
で下が紫。

神具などの展示

9月14日(木)15日(金)

A M 8:00～P M 4:00(予定)

かつて掃部宿として千住のなかでも
は未定。(7月現在)

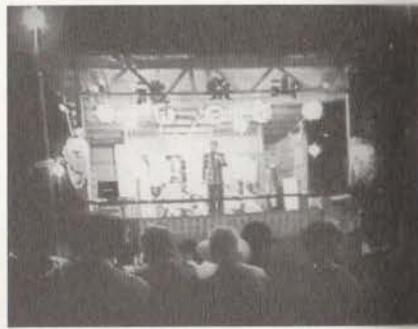


もつとも賑わった仲町。神社に残る保
存品の数々は、他で見られない逸品ぞ
ろい。実は4丁目氷川神社で今年立て
られる大のぼりと同様の大きさ、歴史
を誇るのぼりがここにある。立てな
いにせよ、大祭なので展示はしてもら
いたいものだが、今のところ展示品目
は未定。(7月現在)

存品の数々は、他で見られない逸品ぞ
ろい。実は4丁目氷川神社で今年立て
られる大のぼりと同様の大きさ、歴史
を誇るのぼりがここにある。立てな
いにせよ、大祭なので展示はしてもら
いたいものだが、今のところ展示品目
は未定。(7月現在)

5年に一度のこと。見逃せない。こち
らで馬にまたがる宮司の正装は上が赤
で下が紫。

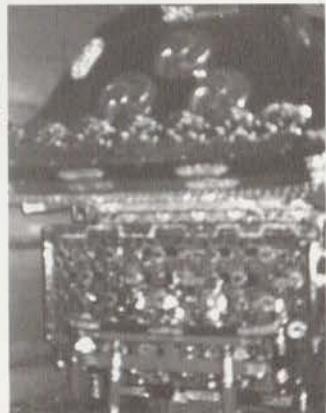
行列ありお神楽あり、演芸大会や夜店もでる盛りだくさんな仲
町の祭りだが、ひとつの見どころは、保存されてきた神輿や文
化財級の品々だろう。大祭の今年は5年ぶりに宮神輿も担ぎ出
されるし、神具も一部公開される予定。



大祭へ
行こう!

(千住宮元町3-8
3882-1588 鈴木)

【八幡神社】



宮神輿巡行

9月10(日) A M 10:00～P M 3:00頃

大祭のときだけ巡行する宮神輿は、
大きさは中型だが帝釈天も手がけた
当時一流の宮彫師金子光清が彫刻を
担当した逸品。東京の神輿の多くが、
震災、戦災で焼けて灰と化してしま
つたことを思えば、貴重だ。

奉納演芸大会

9月14日(木) P M 6:00頃～P M 9:00頃

仲町では、実は神輿渡御前日の宵宮

を一番楽しみにしている人も少なくない。金魚すくいや綿アメなどの夜店が
取りまく境内で、お笑いバンドとつぶ
ボーカルズが、ノリのいい音楽とおしゃ
べりで楽しませてくれる。南千住から
は、乱れ打ちが迫力満点のつくも太鼓、
そして仲町内きつての歌姫たちも舞

台に登場するほか、なかなか豪華な景
品が当たる富くじもあるのだ。

神楽

9月15日(金) A M 9:00頃～P M 6:00頃
(1日3幕程度)

仮設の神楽殿が設置され、本氷川神社
と同様、江戸里神楽が舞われる(16ペー
ジ参照)。江戸時代から伝承されてき
ている舞だが、どの神社でも観られる
ものではないので、一見の価値あり。

大祭へ
行こう！

【4丁目氷川神社】

(千住4-31-1、3881-5859／千四翠鳳会)

9月の大祭を前に、江戸時代より伝わる「のぼり」を出そうと、2000年5月7日、氏子たちが動き出した。木づちの音が「ゴンゴンゴン」と境内に響き渡る。祭りには、もちろん神輿藏のなかの江戸神輿も顔を出す。江戸が一気によみがえる、今年は千住4丁目がおもしろい。

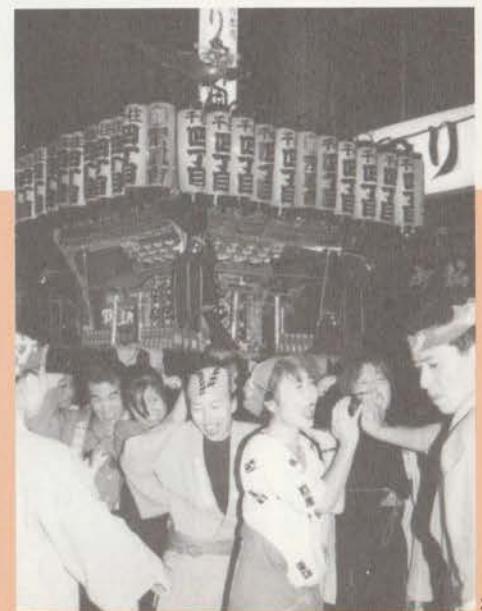
752年(宝暦2年)につくられた大のぼりが一对、4丁目氷川神社に保存されている。旗面が幅1.5メートル、長さ15メートルもあり、のぼりを取り付ける大柱にいたってはなんと22メートル。そのスケールたるや想像以上の迫力だ。クレーン車もない250年も昔に、よくもこれだけののぼりがあげられたものだと感心させられる。「氷川大明神」の文字が書かれていて、当時浅草からも見えたのが自慢だったという。しかし、あまりの重さ、大きさゆえに、191年(大正6年)を最後に立てられなくなってしまった。以前から「これじや宝の持ち腐れ」との声があり、5年に一度の大祭である2000年の今年「区切りもいいので、本来の姿に」との声が高まつた。

これだけの重量を支えるには、地下にも1.5メートル近い穴を掘らなければならない。5メートルといえば小柄な女性の身長ほど。無事立ち上がるまで苦労も多いだろうが、4丁目氏子たちの意氣込みは相当なものである。

4丁目氷川神社にはまだまだお宝が保管されているが、なかでも静御前をてっぺんにかかげる三層づくりの江戸型山車は、現在の東京では非常に珍しい逸品。現在足立区立郷土博物館に展示されているが、「次の大祭には、これも出せねば……」と氏子たちの夢はさらに拡がっている。

83年ぶり。復活大のぼり！

9月10日(日)頃のぼり掲揚～17日(日)頃片付け(予定)



宮神輿渡御

9月15日(金)
A M 9:30 宮出し～P M 5:30 宮入

大祭の今年は、1854年(嘉永7年)造の宮神輿も町内を練り歩く。黄金色にきらめく梨地塗りの屋根が美しい神輿で、珍しく、屋根下に垂れ下がる飾り(ようらぐ)をつけたまま町内に出でいく。シャンシャンと響く軽やかなようらぐの音色が、一味違う祭り風情をかもしている。



5月7日の仮組みの様子

千住を出発点とした中国の禅僧と
千住を愛した男たちの物語



この大のぼりが作られたいきさつについて、史家であり篆刻家でもある渡辺春園さんからおもしろい話を伺った。

延宝6年(1678年)、東臘禪師という中国の禅僧が大志を抱いて江戸にやってきた。外国人ということで江戸での活動が認められず、隅田川の外である千住の甲良屋敷(現千四小の場所)に腰を落ち着けた。禪師が中国から持ってきた魚藍觀音は千住4丁目氷川神社に預けられ本寺佛となり、同じく持参したすももの種は甲良屋敷に植えられ、彼は千住で中国文化を教えることとなり、江戸の文人たちが通って来たという。後に水戸黄門光圀公に目をかけられ活躍するのだが、光圀公は千住を江戸のうちととらえたので千住での3年間を「陽すべきこと」と考え、千住の活動を伏せて禪僧に関する文をしたためた。そのため彼が持ってきた「魚藍觀音」も「すもも」も伏せられたまま月日が流れだが、宝暦2年(1752年)、禪師の元に奉公し後に琴の名手となつた小野田東川が、禪師の千住での足跡を示唆する碑を甲良屋敷のなかに建てた。これをきっかけに禪師の千住での実績を伝えないと各所に働きかけたのが細井九臘という書家である。そのもくろみは実現しなかったわけだが、同じ年(1752年)の秋、禪師ゆかりの4丁目氷川神社のこの巨大のぼりを作ることだけは実現したというのだ。大のぼりの『氷川大明神』の文字を書いたのが細井九臘である。このお話をしてくださった渡辺春園さん(千住4丁目住)は、長い年月をかけて千四小(もと甲良屋敷)の碑を読み解き、彼らの足跡をたどってこられたが、近く書物にまとめる予定である。

ちなみに4丁目氷川神社の魚藍觀音は明治初年の廃仏毀釈の流れの中で神社前を流れていた小川に捨てられ、お隣の長円寺住職に拾われたそうで、現在も長円寺に祀られている。その美しいお顔は一見の価値あり。

太鼓やお囃子の山車の前で鶴を取るのも鳶の役目。写真は千住橋戸町の山車



とび 祭りの裏方 鳶のしごと



写真は1995年千住3丁目町会の御酒所。当時の鳶が作った小さな庭風の演出が見事。町会によって、さまざまな演出がなされ、神輿や獅子頭が飾られる



本氷川神社では、祭りの後、神輿をばらして洗い、完全に乾かし、すべてをチェックしてから片づける。鳶はもちろんが、祭り人間の千住3丁目町会の面々がテキバキと働いていた



「祭りが支障なく行われるための準備すべてが、鳶の仕事ですよ」千住氷川神社の鳶の頭をつとめる山田友計さんが言う。鳶は、ふだんは建築や土木作業にたずさわるが、江戸の頃から町火消しも請け負い、正月の出初式でハシゴ乗りを披露するなど、独特的の風俗や気風を伝承する。そして、祭りにはなくてはならない縁の下の力持ちである。

たとえば祭りの数日前からの、神社や町なかの飾り付けも鳶たちの仕事だ。 笹が立ち、しめ縄がはられ、祭り提灯が吊られると、なんとなくそわそわうきうきしてくるもの。実はそんな気分も、鳶の演出のたまものなのだ。

神輿については、あらゆることが鳶の領分。神輿倉から取り出し、綱をつけたり鳳凰を載せたり、凜々しい祭り姿に仕上げて、神社の境内なら「お仮屋」、町の中では「御酒所」を組み立てそのなかに設置する。

今年のような大祭では、渡御行列も壮大だ。 行列を歩く面々の持ち物、たとえばご神木や唐びつ、のぼり旗などをとどこおりなく準備するのも鳶たちの役目。そしてすべてに抜かりがないか、事前にチェックする。

祭り当日は、渡御行列のそばにつき、誰にも怪我なく町内を回ってこられるよう目を配る。それでもまだ鳶たちの仕事は終わらない。祭り終了後の片づけは、来年もまた、町内のみんなが楽しむための、なくてはならないしことのだ。まだまだ書ききれないくらい細部にわたる鳶たちの気配りが、じつは祭を潤滑にうごかしていたのである。

元禄時代に端を発するともいわれる柳原稻荷神社では毎年9月半ばにお祭りが行われるが、今年は3年ぶりの大祭だ。いつも年の年ならあかりを入れた万燈神輿の出るところ、今年は宮神輿が渡御するので注目したい。

9月17日(日)
AM 9:30 ~ PM 3:30
15、16日の夜には、縁日の出店も並ぶにぎやかな奉納盆踊り大会。それが終わると、神さまの御靈を神輿に遷す厳かな儀式が、淨暗といわれる真つ暗な闇のなかで音もなく行われる。17日には、袴を着けた総代さんたちとともに、宮司の乗るオープントンカート先頭に、宮神輿や4基の子ども神輿が町内を練り歩く。宮神輿の作られた年代は不明だが、宮司によると明治期のものではないかとのこと。展示のみの獅子頭を含め、歴史の風が伝わる3日間だ。

大祭へ
行こう！

(柳原2-38、
3881-1589高田)

9月15日(金)16日(土)
PM 6:30 ~ PM 10:00

宮神輿の町内渡御



箕輪囃子

9月15日(金) 16日(土) 17日(日)

AM 8:00 ~ PM 6:00

「お祭りのときに飲むコップ酒って、おいしくねえ」と話すのは柳原に住む徳留由喜枝さん。地元に伝わる箕輪囃子を始めて6年になる。今年行われる、3年に一度の大祭を心踊らせて待ちわびている人のひとりだ。お祭りの間は、お囃子を演奏したりお神輿を担いだりと忙しだそう。太鼓を叩いている間は、リズムに身を任せていると、頭の中が真っ白になるほど夢中になり、叩き終わると、日頃のストレスがきれいに洗い流されているようだ、という。腕が上がってくると、自分なりのアレンジができるようになり、やればやるほど楽しくなるそうだ。

箕輪囃子は、お祭りのときにお神輿とともに巡回、また境内の神樂殿でも終日奉納される。他のお囃子に比べ、演奏法が複雑でテンポも早く、この柳原の町の人々の手を通して受け継がれてきたことが非常に貴重な伝統文化だ。今も30数名のグループで活発に活動、練習も続けている。徳留さんによれば、ツクツクと小さく正確に、かつメリハリをつけて太鼓を叩くのが特に難しいとか。聴きどころは「川ちがい」といわれる、会話するように演奏されるアドリブの掛け合いだ。江戸時代から伝わるという笛や太鼓の音を、今年は聴きに行ってみませんか。

千住の寄席

年増女を演ずる狂気の落語

金蔵寺落語会

吸い込まれそうな大きな眼。クルクルと表情が変わる。低い声でゆつくりとまくら部分（落語本題の前置き）を始め、聞き取ろうと耳をすました瞬間に、ガラつと調子を変えて声高に本題を語り出す。扇子片手に丁々発止、唾は飛ぶし汗も散る。突然の豹変にびっくりしたらもう咄家の術中にはまつたも同然、あとは一気にサゲまでノンストップだ。

金蔵寺落語会の席亭でもある三遊亭栄樂さんは、抗い難い不思議な魅力がある。九州出身で大学3年の時に三遊亭円楽師匠に入門して16年、神主の免許もつ変わり種。その独特の嘶つぶりに惚れた住職の招



お彼岸には落語を聞こう

安養院彼岸会奉納落語

そもそも落語の始まりとは？ 日本最古のかな文字文学といわれる『竹取物語』にみる言葉遊びをその起源とみる説や、武将や大名のお側近くにいて話し相手となつていた御伽衆が草分けであるという説などいろいろあるが、実はお寺もひとくち落語起源説に絡んでいる。というのは和尚さんの説教。わかりやすく笑い話も交えながら仏の道を説く、その語り口が落語のはじまりかもしれないというのだ。

安養院の寄席はまさに、その落語起源説を裏付けるかのようにお彼岸の日に和尚さんの説教と併せて行なわれる。「ええ、お寺からも頼まれる事が多いですよ。今日もこの後別のところと掛け持ちですから。ありがたいお説教だけってのもね。落語だと支度もいらないし。腹の底から笑つて御先祖様の供養つてのがいいですね」とは柳家小はん師匠。古典落語ならこの人、といわれる実力派小はん師匠は、千住生まれで、安養院の檀家でもある。10歳の頃からラジオから聞こえる落語が好きになりました。12、3歳で父親に連れて行

きで千住に来たのが縁で、現在は千住中居町在住。年6回行なっている寄席も、もう8年目を迎える。

V番組の『笑点』にも出ている三遊亭愛樂さんなど。千住以外でも都内各地で落語会を行なうが、長屋ものは千住に一番ぴたりくるとか。「気持ちが気さくで、下町の雰囲気が残っているから、お客さんにわかりやすい」

「師匠が、落語家は常識人じやいけないと。何か独特の世界を持っている、自分じやなきやできない嘶家になりたいですね。僕の落語は『狂氣』の落語かな（笑）。現在の持ち嘶は150弱。なかでも人情嘶や色っぽい嘶が好きという。取材日の落語会でも年増女性がでてくる嘶にどんどん熱が入り、太い男声がかもし出す、ぞくつとくるような艶っぽい『年増の色気』に圧倒されっぱなしだった。



Data

出演者：柳家小はん　日時：春と秋のお彼岸の中日
会場：安養院本堂（千住5-17-9　問先 3881-0686）
入場料：無料

知ればもっと楽しい落語のまめ知識

【真打】一座のハナ、トリを務める技量の落語家。ちなみに前座見習い→前座→二つ目→真打が落語家の序列【高座返し】演者交代の時、高座の座布団を返すこと。この仕事は前座の役割のことが多い【マクラ】噺の本題に入る前のちょっとした話。時事ネタや季節ネタが多い。ここでぐっとお客様の心をつかんで本題に入っていく。【オチ、下け】落語の締めくくりのひとつこと。これが決まるときも決まらないとでは雲泥の違いがある

【席亭】寄席・落語会の経営者、つまり主催し、お金を出す人【中入り】休憩時間のこと【木戸銭】寄席・落語会の入場料。木戸とは寄席の入口のこと。【下座】お嬢のことを【色物】落語・講談以外の寄席演芸【上下をつける】嘶家さんの顔が左右に動いて2人を演じ分けることが多いが、一般に、お客様からみて左側（下手）へむいてしゃべっているのが目上や上位の人（上手）ということになる。だから上手には、殿様や武士、旦那、家主、下手には家来、店子、出入りの人などが登場する

むかし千住には寄席（演芸場）があつた。森鷗外も通つた当時の寄席はなくなつたけれど、場所を変え出演者を変え、バラエティ豊かに現代の寄席が復活、それぞれ個性豊かに定期公演を続けている。大笑いしてみたい気分の日、ふらりと出かけてみませんか？



Data

出演者：三遊亭栄樂
日時：偶数月の第3金曜日（年6回）
会場：金蔵寺本堂（千住2-63、問先3879-1004）
入場料：1500円
三遊亭栄樂ホームページアドレス：
www1.odn.ne.jp/eiraku

猿回し、和太鼓から福引きまで

日の出寄席

縁起招きに頭をぱくつとひと噛みするふりをしながら、獅子舞のお獅子が会場内を練り歩く。顔を真っ赤にして泣きそうになる子供達や、それをほほえみながら見守る大人達。楽しそうな声がそこそこにわきあがる。

「落語だけなく講談やバントマイムなど毎回出し物には工夫をこらしています。」とは企画運営をほとんど一人でこなす嬉野慶多さん。ご自身も落語に年には何回かはプロも呼ぶ。取材した日は年明け1回目ともあって、獅子舞や太鼓などお目でたい出し物が中心だったが、メインは「日本最北端の漸家」東家夢助さんの落語。まあるい目をくりくりと動かしながら心地よいテンポでポンボンとくりだされる話し方に、最初は不思議がつっていた子供

猿回しの三村三岳さんがゲスト出演。お猿さんはややごきげん斜めだったが、猿の不機嫌さえネタにしてしまう三岳さんのトクには脱帽。笑わせてもらつた。他にもなんと町雑誌千住のメンバーまで当たつてしまつたお楽しみ福引きコーンナ!

お茶お茶菓子がついで入場料はたつたの千円。しかもアマチュアだけの時は五百円で楽しめる。千住の染物屋さんで作ったという「日の出寄席」ののぼりと提灯が寄席の日の目印。

Data

出演者：毎回異なる
日時：2か月に1回程度
会場：東部労音地下センター（日の出町25-2、問先3879-6191）
入場料：通常500円（プロ出演の際は1000円、高校生以下無料）

日の出寄席



Data

出演者：立川一門と三遊亭一門
日時：毎月第3日曜日
場所：区内銭湯（千住地区で毎回2軒程度）
問先：足立浴場連合会 千住地区（金の湯）
3881-5869
入場料：無料



ファミリーな雰囲気満点

湯つ足り寄席

平成11年12月にうぶ声をあげた、できたてほやほやの寄席。主催は足立区浴場連合会。毎月第3日曜日に足立区内の10軒の銭湯（当番制）で同時多発的におこなわれる。取材日におじやましたのは小桜

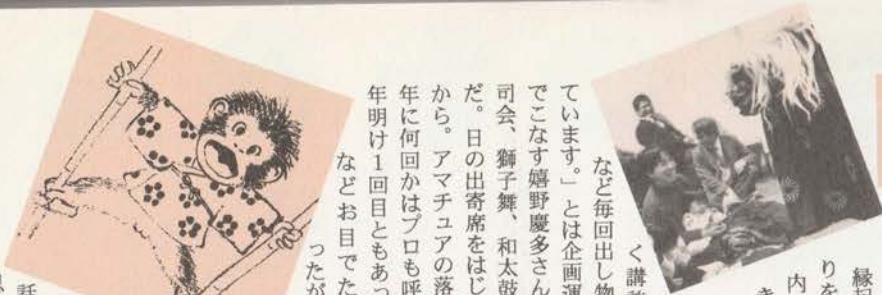
湯。男湯の脱衣所を利用した会場に設えられた高座には、立川流の若手・立川談修さんの姿。専修大学を卒業後、立川流の門戸を叩いて入門。出身大学の一文字をとつて談修と名をつけた。お客様はお風呂の常連さんがほとんどだが、談修さんの漸のツボにはまつてみんな大笑いしていた。一席ぶつた後は、おしゃべりタイム。さつきまで大笑いしていたおばあちゃんどんとここにこのようないい間話を。「私のような前座にとつて、古典落語が得意なのですが、千住の土地ネタをもりこんで、みんなに楽しんでいただける漸を心掛けています」と言えば、「孫のようで、若くてうれしいわあ」と周りのおばあちゃんたちからさすかさずツツコミが入る。最後の記念撮影はまるでアイドルの撮影会のようでした。湯つたり寄席には他にも若手の漸家さんたちが出ているため、未来の真打ちの青田買には、銭湯に入つて身も心も、リフレッシュ！

千住に寄席があった頃

大正15年の「東京演芸場組合員名簿」によると、千住周辺にあった演芸場は8つ。そのうち千住1丁目にあった小松亭は昭和20年の終戦直後まで営業していた。出し物は講談、落語、浪曲のほかに旅芸人の一座も掛けり、もぎりや下足番、木戸番もいたしっかりした建物だったという。もうひとつ3丁目に大河亭という寄席があったが、それはのちに寄席をやめて映画館になった。現在はいずれも現存していない。

森鷗外と寄席

「3丁目にも寄席がありました」が、「市場の近くに寄席があり」そこへ「なるべく目立たぬ服装をして」通ったという千住の寄席の話が、森鷗外の妹、小金井喜美子が書いた『鷗外の想い出』に出てくる。鷗外の当時の住居は千住1丁目。わざわざ家から離れた遠くの寄席へ、しかも目立たぬ格好をして通っていたらしい寄席好きの千住人鷗外の姿がここにうかがえる。



「講談やバントマイムなど毎回出し物には工夫をこらしています。」とは企画運営をほとんど一人でこなす嬉野慶多さん。ご自身も落語に年には何回かはプロも呼ぶ。取材した日は年明け1回目ともあって、獅子舞や太鼓などお目でたい出し物が中心だったが、メインは「日本最北端の漸家」東家夢助さんの落語。まあるい目をくりくりと動かしながら心地よいテンポでポンボンとくりだされる話し方に、最初は不思議がつっていた子供



猿回しの三村三岳さんがゲスト出演。お猿さんはややごきげん斜めだったが、猿の不機嫌さえネタにしてしまう三岳さんのトクには脱帽。笑わせてもらつた。他にもなんと町雑誌千住のメンバーまで当たつてしまつたお楽しみ福引きコーンナ!

お茶お茶菓子がついで入場料はたつたの千円。しかもアマチュアだけの時は五百円で楽しめる。千住の染物屋さんで作ったという「日の出寄席」ののぼりと提灯が寄席の日の目印。



千住の元気 EVENT!

散歩気分で
リラシックコンサート
柳原音楽祭

千住にはユニークなイベントが数々あるけれど、町の人々のがんばりがさわやかであたたかい、2つのイベントを、今号ではご紹介したい。

「♪♪とおきくやまにひくはおうちてく♪」ってのがあるでしょう？あれもともとはクラシックなんだよ。それを子供達にも知つてもらいたくてさ」。笑顔で語るのは、柳原音楽祭事業部の小倉敏政さん。

そもそもこの音楽祭は、小倉さんがドボルザーク作曲の『新世界より』第2樂章のこの『家路』に出逢い、クラシック音楽が身近にあることを子供達を始め多くの人々にも知つてもらいたいという思いから始まった。そこから約1年間、小倉さんや賛同する柳原の町の人々が、周囲の人々や区の活性化センター、オーケストラに働きかけ実現にこぎつけたものである。今まですっかり柳原の秋の恒例行事となり、毎年柳原小学校の体育館に本格的なオーケストラを招いて行われている。下駄履きで行けるクラシック

コンサートとして、例年500人が生のオーケストラに耳を傾ける。「すぐそばで聴くフルオーケストラは、ぞくぞくとくるような迫力がありますよ」音楽祭に足を運ぶ町の人がそう話してくれた。当日には子供からお年寄りまでが、縁日にでも出かけるような下駄履きの普段着で小学校の体育館に集まつてくる。そして看板やのぼりには『柳原音楽祭』の文字。8回を迎えた昨年は足立シティオーケストラを招いて行われ、指揮者による楽曲の紹介や楽団員による楽器の説明など、普通のコンサートでは味わえないアツトホームな雰囲気の中でクラシック音楽を楽しんだ。

公演が終わつてから小倉さんが「どうだい、いいだろ？」と笑顔を見せてくれた。



★ DATA ★

会場 柳原小学校体育館 日時 10~11月の吉日

2000年は11月5日 ホイヤーヴェルク管弦楽団 指揮／山田 和樹

料金（全席自由）700円

お問い合わせ 音楽祭事業部 小倉 TEL03-3888-3577



元気に長生きして
ぱっくりいけると
評判の厄除け地蔵
大川町 地蔵祭

戦前、第3小学校が火事になつたとき、学校の敷地内から掘り出されたお地蔵さまがある。これを祀つておたら、近隣は戦中も大した被害に及ばなかつた。そこで戦後有志がほこらをつくつて祀つたという。そのうち、奉納されたり地蔵講で買い求めたりして現在お地蔵さまは4体いらつしやる。向かつて左はしが、戦前から千住大川町を守るお地蔵さまだ。ほこらも徐々に大きくなつた。お詣りを続けていたお年寄りが、元気に長生きして、苦し

たり、地元の人たちの思い入れがたつぶり伝わつてくる、ステキな祭だ。

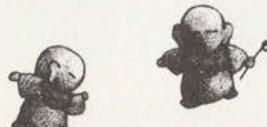


★ DATA ★

場所 千住大川町地蔵堂（千寿第三小学校脇）

日時 元旦、1月24日、5月24日、9月24日（正五九）

お問い合わせ 石井 TEL03-3882-1076

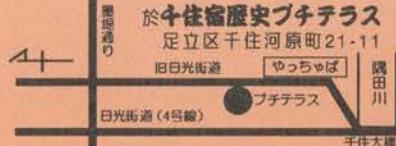


Autumun Adventure 2000

今年も
senju kura no machi
千住・蔵の町
<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/8177>

千住・蔵の町・博物館

9月23日～10月1日
10：00～18：00



蔵めぐりウォークラリー

おみやげ付き
ウオークラリー
9/23~
10/31まで
千住すごろくマップを手が
かりに町歩き。期間中、
指定された数ヶ所の蔵を
めぐると、もれなくお菓子
(提供:富田家) がもらえます

同時開催
千住・まちの風景展

10/8~15 14:00~19:00

千住5-6-11 なかだ邸 問先 TEL & FAX3882-4942

同時開催

千住・路上アート展
9/23(土)~10/1(月)
結約2000

本部／千住3-70 花椿美容室2F
問先／大倉 TEL 090-9835-0669

結婚したときはまさに戦時中だつた。そば粉は配給となつて思うように店が開けず、たまに開けると、客がぐるつと店を取りまいた。仕事ができないと、ちかさんは故郷から野菜の苗をもらってきて、荒川土手でさつまいもやいんげん、菜つばなどを作った。「百姓から出でるから、けつこうできましたよ」。幸いにも店は戦争で焼けることもなかつた。

戦後は都電通り(現在の国道4号線日光街道)に夜店が出て大変賑やかであつた。混乱の中にも活気がありよかつたとちかさんは言う。「いまは変わりすぎたよね」：夏になるとかき氷やアイスキャンディを作つて、荒川土手で遊ぶ子どもたちに売りに行つたりもした。

当時の蕎麦屋の一日は、朝は7時に起き、朝ごはんを食べにくる人たちのために8時に



高齢の天ぶらを揚げるちかさん

高齢社会となつてだれもが願うことのひとつに「生涯現役」という言葉がある。いくつになつても健康で、働く意欲と力を持ち続けたいという願いが、そう言わせるのであろう。江端ちかさんは、まさに91才にして現役の薔薇屋である。最初にお尋ねしたときも、割烹着をかけ、海老の天ぶらを揚げていらした。小柄で軽々とした身のこなしは、才ほども若く見える。

現役のひと
江端ちかさん 91才

卷之二

110

千住
明治の女伝
<9>

ちかさんは、明治41年 愛知県丹羽郡の農家に生まれた。女5人男5人の10人兄妹の6番目である。小学校を出て町の機織工場で働いているとき、はやり病にかかり入

胸をよぎつた

は店を開けた。夜は11時まで営業し、その後銭湯に出かける生活で、寝るのはいつも1時を過ぎた。現在は週に一度休みを取るが、当時は休みも決まっておらず、用のある日以外はいつも店を開けていた。喜一さんと力を合わせて働いて、女の子は次々嫁に出し、蕎麦屋の支店も寿町、中居町、堀切と増やしていく。外食産業もコンビニもない時代で出前も多く、若い衆が4人も5人も働いていた。大変でしたね」と言うと、「まわりもみんなそうやつたからね」と笑った。

ようやく一家が落ち着いてきたころ、お店にとって大きな出来事が起る。目の前を通っていた都電が廃止され（昭和43年2月）、その翌年、日光街道拡幅工事

丸髪を結ったちかさん。
22歳くらいのとき

が始まったのである。拡幅のため、店は三分の二ほどに小さくなつたが、長年慣れ親しんだ土地を出ていく気はしなかつたという。ちかさんに、上京してつらかったことを聞くと、言葉に慣れなかつた話をあげてくれた。江戸っ子言葉がきつく思えたり、隣組の人たちの話がわからず苦労もした。しかし「気にしないほうやからね」とわずかに残る大阪弁はじりで彼女は言つた。持ち前の頑張りを積み重ねるうち、楽しみは組合の人たちとの旅行と答えるほどにこの地に馴染んだ。

蕎麦屋で一番気を使うのは何ですか?といふ質問には即座に「味だね」という言葉が返ってきた。今も孫夫婦と一緒に店に立つ、まさに「現役の人」の言葉だつた。

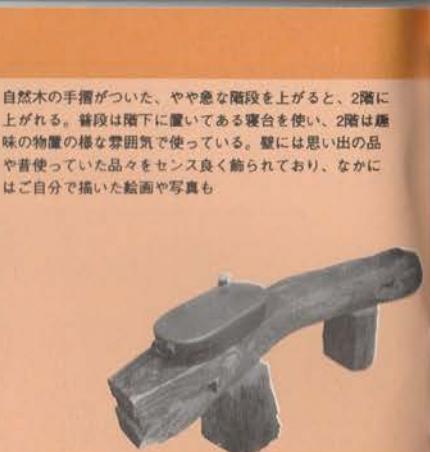
が始まったのである。拡幅のため、店は三分の二ほどに小さくなつたが、長年慣れ親しんだ土地を出ていく気はしなかつたという。ちかさんには、上京してつらかったことを聞くと、言葉に慣れなかつた話をあげてくれた。江戸っ子言葉がきつく思えたら、隣組の人たちの話がわからず苦労もした。しかし「気にしないほうやからね」とわずかに残る大阪弁つまりで彼女は言つた。持ち前の頑張りを積み重ねるうち、楽しみは組合の人たちとの旅行と答えるほどにこの地に馴染んだ。

蕎麦屋で一番氣を使うのは何ですか?といふ質問には即座に「味だね」という言葉が返ってきた。今も孫夫婦と一緒に店に立つ、まさに「現役の人」の言葉だつた。

胸をよぎつた。

22才のとき、近所の人の紹介で酒・醤油の業界紙の仕事をしていた人と結婚するが、結婚してみて大変な大酒飲みであることがわかった。7年ほど一緒にいたが、だんだんつらくなってきて「自分で決めて、人に間に入つてもらつてきれいにした」つまり離婚して一人で生きる道を選んだ。多少ミシンができたので、さらに稽古して、前掛けやシャツをつくろ仕事を受けた。

そんなちかさんが縁あつて、昭和19年、37才のとき江端喜一さんと結婚し、上京。当時53才の喜一さんは、すでに現在地(千住大川町)での喜一月の名の蕎麦屋を開いていた。亡くなつた先妻との間に2子あり、さらに喜一さんの妹夫婦の子2人を預かつて育っていた。子供といつてももう成人を迎えるほどの歳であったが、ちかさんはいっぺんに4人の子の母となつたわけである。喜一さんはちかさんと同郷で隣村の出身だった。ちかさんの姉さんが喜一さんの兄さんと結婚していた縁で、ちかさんは以前から一生懸命働く喜一さんを知つており、大人しくいい人だなど思つていたといふ。思った通り、喜一さんは酒もタバコもやらず、働き者だった。小学校しか出ていない、97才で亡くなつた。

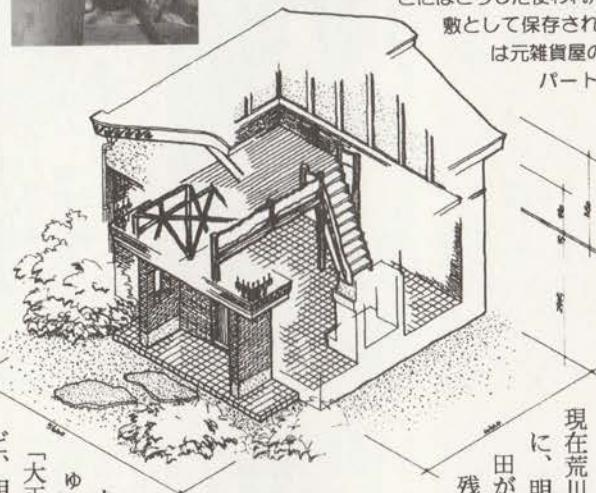


蔵に住む(1)

【大塚家の蔵】



こちらは母屋の土蔵



本来大切な物を納めておくのが主な目的だった土蔵は、防災というだけではなく、防犯上も有利です。内側の空間を安全に保つ事ができるため次第に色々な用途に使われるようになってゆき、大切な行事や賓客をもてなす空間としても使われるようになりました。蔵の住まいは日本各地に見られ、山形県山形市や福島県喜多方市などにはこうした使われ方の名残である、座敷蔵が上座敷として保存されていますし、栃木県栃木市には元雑貨屋の商品蔵を改造した蔵造りのアパートまでありました。千住には、50を越える蔵が今もあります。そのほとんどは収蔵用に使われていますが、何力所かで蔵の住まいを確認しています。

今回は、ユニークな室内空間をつくられている煉瓦蔵を訪問しました。

御主人からお話をうかがいました。
「家は、元々荒川放水路の中になつた綾瀬村弥五郎新田という所だつたの。ヤゴの大塚と呼ばれていた地主で、小作が大勢いたよ。」

明治42年帝国陸軍陸地測量部作成の地形図を見ると、奥州日光道中に沿つて千住宿が伸び、現在荒川の流路になつている旧水戸佐倉道沿いに、明治22年5月に合併した綾瀬村弥五郎新田がありました。旧綾瀬川の蛇行河川跡が残り、農耕地の中に農家が散在していく江戸近郊の風情を感じさせてくれます。

明治43年大洪水があり、翌年荒川放水路掘削が決定し、千住町・江北村・西新井村・綾瀬村がその流域となり、大規模な測量と土地買収・移転がおこなわれました。千住は荒川放水路掘削で大きく変わりました。

元々の町が川で分断され島のようになり、今の千住が形成されていきました。そのため今でも川向こうに「せんじゅ」を名乗る学校が残っています。「大正7年に今の所に引っ越ししてきたんだけど、明治20年築で二階建ての母屋は、コロに乗せてヤツコラセつと曳き家してきました。昔は藁屋根だつたんだ。」

大塚さんの母屋は土間を持つ規模の大きい農家の造りで、興味を引かれる建物でした。

■隠れ家みたいな蔵の家■

「大塚家には蔵が三つあつたけど今は二つ残つているよ。どちらも大正7年に荒川放水路の中から引っ越してき時に建てたものなの。土蔵は親戚が質屋をやつていて質蔵になつていて、煉瓦蔵の方は昔は米を入れていたんだけど使わなくなつて20年前天井が腐つて梁も落ちていたのを、手を入れて使つてるの。」

天井はみんなやり変えて、元ははめ殺しだつた窓を開くように変えたり、床もタイルを貼つてきていた柱を持ちドルフィンハウスと命名された蔵の内部は、どこか獨特なボヘミアン風。

夏は涼しいよ。壁が30センチ位あつて、外の暑さが伝わってこないし冷房を入れるとカンカンに冷えて、冷蔵庫のようになりますよ。冬は寒いけど、暖炉でゴミを燃やしながらエアコンを入れ、プラス除湿器を使うとホカホカと温かいよ。除湿器を使うと2度位は上がるしね。ちょっとと温気が多いけど。」

改装のため廃棄することになつた天井板を洗つて絵を描いたものや、梁で造つた腰掛け、米を計つていた一斗升のゴミ箱、アサガオ（男性用トイレ）を転用した傘立てなどアイデアたっぷりのリサイクル品が、新規には出せない風合いで蔵の住まいにマッチしています。工夫するのが面白いとおっしゃり、生活をたっぷり楽しんでいる、元広告マンの作り上げた室内空間は、独特的の景色と風情で豊かな表情を見せていました。

千住発見 晴たらライねッ! の千住

「あれっ、ワタシ写真上手くなったかしら」… 阿部知代

千住は…いつも実家に帰るとき、東武伊勢崎線の特急の窓から眺めるだけだった千住の街。今回はじめて歩いてみて、初めてなのに、なんだかすごく懐かしい気持でいっぱいになりました。そして、出会った方々のすべて暖かかったこと！　たくさん撮った写真は、被写体となって下さった千住の街と人々の魅力のおかげで、何やらとてもすてきな作品に仕上がってきました。それは、「あれっ、ワタシ写真上手くなったかしら」って、錯覚するくらい。ははは。

とにかく、みなさまありがとうございました。またあなたの街に帰りたいです。ふらっと、ね。



2000年4月8日（土）朝8時、寝ぼけまなこでテレビを入れたら千住が映ってた…って電話をいくつかいただきました。あなたは観られましたか？　3人のアナウンサーがカメラ片手に千住の路地を歩いた、フジテレビの『晴れたらいいね』。千住はテレビでもたまに取り上げてもらいますが、今回はなんだかカッコ良く、ステキな仕上がりだったので、3人の撮影フィルムをお借りしメッセージもいただいて、その雰囲気をお伝えしたいと思います！



言葉を交わすのが、ホントに楽しかったです…伊藤利尋

町並みや雰囲気は勿論なんですが、なんといっても、千住の人の人柄です。業界では、よく素人の方のキャラクターについて、『テレビ向き』とか、そうでないとか言ったりするのですが、(感じ悪くてすみません)千住の方々は『ナチュラルにテレビ向き』の方々ばかりで、撮影だから、ということを抜きにして、言葉を交わすのが、ホントに楽しかったです。

特に印象的だったのは、大阪から千住に移って5年、『千住は、ホンマにエエですわー』と関西弁のまま、千住を愛している『千住』編集委員の方です。

千住の風景って日本人の遺伝子にインプットされているのかな… 佐々木恭子

いややはや、千住を探索して、思いました。あー、東京って広いんだなあって。私の知らない「東京」が千住にはたくさんありました。なにしろ、私の中の原風景よりも時代をさかのぼったような町並みには興奮しっぱなしで、その家や工場に一軒一軒に、ひとひとの営みを感じると、はじめて見る光景なのに、なぜか懐かしさを感じました。

千住の風景って、日本人の遺伝子の中に記憶としてしっかりインプットされているのかな…。それに、出会う人みんな、気さくでいい人で、パワフルで、お茶目。カメラを向けながら、「こんにちわ。撮ってもいいですか」と声をかけると、そこから自然と会話がはずんで、元気をもらいました。こういう自然な出会いって、都心じゃなかなかできませんよね。

千住に行って以来、路地を見つけるととても嬉しくて、その気で見ていると、東京って意外と古くからある路地が残っているんですね。都心でも、ビルの合間にぽつんと昔からおそらく佇まいの変わっていない豆腐屋さんや煎餅屋さんなどがあるし、代官山や家の近所（品川ですが）のあたりでも、こういった魅力的なお店をたくさん見つけてます。

千住で出会った皆さん、ほんとうにさり気なくお話ししてくださって有難うございました。

天気の良い日に、またぶらぶらしてみたいですね。

千住

20'sの風景

2

この連載では千住の20代を中心とする若者達を写真で追っていきます



2000年4月3日、後楽園ホールでのデビュー戦。3ラウンド2分18秒、伊佐次の左フックが試合を決めた。写真は試合前。セコンドの野口詩延さん

伊佐次 茂伸(20)

所属：野口ジム
(千住龍田町)

町雑誌千住10号にも伊
佐次選手の記事が掲載
されています

応援いただいた皆さんへ、野口ボクシングジムスタッフから試合のご報告

1Rでダウンを奪ったにもかかわらず、2Rは防戦一方。この2Rを落として、試合の流れは相手方に向いたように見えた。身長差とリーチの差にイサジはどうしても中に入っていく事が出来ない、大振りの右に頼るイサジの性格と1RKOを予告したあせりが、イサジ自らを追い詰めていった。この3Rも流れは完全に対戦相手に向いていた。しかしロープ際に追い詰められた、イサジが放った苦し紛れの左が相手の顎を捉えた。次の瞬間、レフリーはイサジをニュートラルコーナーに引き、青コーナーからタオルがなげこまれた。すぐさまリングドクターが呼べられ、イサジのデビュー戦が終わった。KO勝ちだった。だけど、苦しかった。自分が望んだプレッシャーとはいえ、こんなに辛いものだとは思わなかった。試合が終わって、倍以上に腫れた目を自らアイシングしながら、イサジは茶目っ氣たっぷりに呟いていた。「あーキツイッスよ。」…さあ、つぎも、KOだよ。!!(今村)



2000年9月11日、すでに第2戦の予定が組まれている

町雑誌「千住」 VOL.11 2000年 8月発行

発行 千住・町・元気・探険隊 〒120-0044足立区千住線町2-33-23TEL 03-3870-7055

編集 町雑誌千住編集室 〒120-0034足立区千住3-52 TEL & FAX 03-5244-2158

編集人 大野順子 舟橋左斗子 (郵便振替口座) 00140-4-103836

STAFF 取材・原稿／荒居康明 稲垣香苗 上田景子 金澤昌代 川上佳子 川口登紀子 篠崎啓子

白石大介 高頭恵美 藤井紀章 穂原恵子 船田君子 写真／川上佳子 北原俊寛 熊谷永浩 武居厚志

館又将文 松本康一 デザイン協力／安斎順子 イラスト／荒居康明 大倉いすほ MOMO 協力／

板橋陽子 稲葉あや子 大江明俊 大野清士 加藤義久 鈴木涉 原島陽子 穂原恵子 山崎正樹 山本文子

本誌掲載記事・写真・イラスト等の無断複写(コピー)・複製・転載を禁じます。